

和田正人著

『ひとはなぜテレビをみるのか』

(近代文芸社、2001年)

森 楸 (広島修道大学)

「ひとはなぜテレビを見るのか」という書名と、帯にある「ついテレビを見てしまうあなたへ」というコピーを見たかぎりでは、テレビに溺れているわが子に手を焼いている母親向けの啓蒙書だと、つい勘違いする。本文 100 ページ足らずの四六版の軽装版という装丁が、読者の錯覚をさらに深める。なにしろ「テレビが子どもの心を破壊している!」といった種類の、挑発的なタイトルの本が出されるこの頃である。勘違いしても無理はない。しかし「テレビへの接触行動モデルの構築に関する実証的研究」というサブタイトルに気づけば、勘違いすることはなかろう。さらに目次を見れば、本書がいかにアカデミック(学術的)な、ということとは難解な研究書であるかが、すぐ分かる。

「テレビへの接触行動とは」の第 1 章に始まり、第 2 章では、接触モデルの構築に先立って、広く先行研究にあたりながら 3 つのモデルが検討されている。検討された第 1 のモデルは、マス・メディア接触行動を「期待」と「価値」の 2 要因によって説明する期待-価値モデルである。このモデルに基づく 80 年代以降の研究が検討され、このモデルには接触意図と社会的要因が欠けているという理由で、接触行動モデルとしては適切ではないと退けられる。このモデルの理論的基礎は Fishbein モデルであるが、このモデルとの比較の形で Triandis モデルが検討される。後者には「習慣」要因があることで前者より優れており、前者にある「主観的規範」も「社会的要因」として含んでいるので、接触行動の解明には有効であると評価されている。

第 3 章では、Triandis モデルを基礎にして、テレビ接触行動モデルが構築される。このモデルは、習慣と意図のどちらの要因がテレビ接触行動に大きく関連するかを明らかにできるといふ。日本人の生活時間調査によると、余暇時間のうちテレビに費やす時間が最も長い。評者なども日本人の平均視聴時間の 2、3 倍も見ているテレビ依存症だが、なぜテレビを見るかと問われると、返答に詰まる。40 年来の習慣だと簡単に片づけることもできない。そうかといって、見ている番組をすべて、なんらかの「意図」を持って見ていると答える自信もない。「なぜテレビをみるか」その動機を解明することは、はなはだ困難な研究テーマである。この難問に、本研究は真っ正面から取り組んでいる。

本研究でいう「意図」は、合成変数であって、社会的要因、感情、結果の価値(例えばテレビは勉強になる)の各要因を測定し、それらを合成したものである。これら各要因に関する先行研究も検討されている。例えば、社会的要因としての準拠集団とメディア行動との関連研究などは、わが国においてもかつてはかなりの成果を挙げていることが分かる。ところが、感情とか結果の価値といった要因に関する研究は、全くないようである。

そこで第 4 章では、各要因に関する著者自身による調査によって得られた実証的なデータ

に基づいて、第3章で構築したテレビ接触行動モデルの検証を試みる。要因に関する調査は、都立高校の生徒を対象に4回にわたって質問紙法によってなされ、そのデータに因子分析などの統計的処理を加えている。その結果、映画・ドラマ番組への接触意図には感情が、お笑い・バラエティー番組には覚醒条件が、趣味・教養番組には覚醒条件と促進条件が関連するといった興味深い結果が明らかにされている。ところが従来、社会的要因として設定されていた準拠集団は「意図」との関連は見られなかったため、テレビ接触行動モデルの要因としては当てはまらないという結論も出されている。本研究の調査データでは、たぶん相関係数が低かったためこうした結論が出されたのであろう。しかし、こうした大胆な結論を導き出すためには、調査の方法や対象の特性やサンプル数などの検討、さらには準拠集団の概念自体の厳密な検討がなされる必要がある。

総合調査では、特定のテレビ番組だけを選び明確な意図を持って見続ける「選択的接触行動」と、テレビというメディアへの接触が日常行動として習慣化している「非選択的接触行動」の違いを、要因調査によって明らかにしようとしている。すなわち、社会的要因、感情、結果の価値、習慣、促進条件、覚醒条件の6要因に関する質問がそれぞれ5項目ずつ用意され、計615名の高校生を対象に調査されている。重回帰分析の結果、選択的テレビ接触行動は習慣よりも意図の要因と関連が高く、覚醒条件が促進条件よりも大きく関連していた。非選択的テレビ接触行動は、それと全く逆の結果が出ている。このように両者の違いを、関連する要因の違いによって説明できるので、著者が構築したモデルは、テレビ接触行動を説明するのに有効なモデルであると結論されている。

さて、この結論で私自身のテレビ接触行動が説明できるか考えてみた。私自身は明らかに選択的接触行動だと自認しているが、本研究では意図と習慣という相反する両要因とも、選択的接触行動と有意な関連があった。となると、選択的接触行動には、習慣よりも意図の要因のほうが関連が高いという結論も、相対的なものになってしまう。結局、日常的なテレビ接触行動も、実証的な数字のレベルではとても明らかにできない複雑な行動であることを、あらためて確認してくれたことになる。

本書は、国際基督教大学（ICU）に比較的最近提出された5つの学位論文（主査阿久津喜弘教授）のうちの一つである。ICUでは、1960年代からマスコミや視聴覚教育の研究に、研究室全体として組織的に取り組んできた。その主な発表舞台は教育社会学会であり、評者も初期の段階から一連の研究に注目してきた。この研究も、著者自身「あとがき」に記しているように、そうした長年にわたる共同研究の伝統の中から生まれてきたものである。ただ著者は、他大学から博士後期課程に入学、定時制高校の教師をしながら7年かけて本論文を完成されたとのことである。著者の研究意欲と努力に敬意を表したい。